

中觀佛教から真言密教へ

高 田 仁 覺

はじめに

真言密教の教学は、二つの顔をもっている。一つは外教、すなわちアーリヤの宗教、主としてヒンドゥ教に対する顔であり、もう一つは一般佛教（顯教）、主として中觀・唯識の波羅蜜乘に対する顔である。

いまここでは、後者の顔について、言いかえると、とくに中觀佛教（または波羅蜜乘）から見て真言密教の教学はどのような顔をしているかを、インド真言密教の基本的な経軌を根拠にし、代表的なインド・チベットの大学者の意見を取捨して、真言密教の要義を明快に体系化したと見られる、ツォンカバの『ガリム』（大真言道次第論）等に基づいて概説してみたい。

一 真言密教の語義と中觀佛教

まず、真言密教の原語は、サンスクリットの *mantra* または *mantrayāna* である。世俗的な意味では、// 意を救

護する“教えという意味である。『秘密集会の後タントラ』^①に、

「〔六〕根と〔六〕境を縁として生じた〔六〕識（意）を、世間的な行より超越して説かれた三昧耶〔戒〕と律儀、そして三密をもって救護するのが真言行である。」

というのがそれである。また、勝義的な意味では、“空性の智慧である真実智と、世間を救護する悲（方便）とが無二に結合した智”の教えという意味である。すなわち、諸法は無自性であると通達した智慧と、行者自らのうえに三十二相・八十種好によって莊嚴された毘盧遮那などの色身（受用身）に等しい相を修習して、“自己が本尊となった”と慢を生じた方便（悲）とが無二に結合した智を教えるのが真言密教である。

この場合、真言乗の乗（*Yana*）は、“それに乗って果を欲する”意味の「因の乗」と、“欲するところのその果に乗って行く”意味の「果の乗」との二種があるうち、後者の意味である。従って、中観佛教が、所取・能取の所知障（意）を断じ、空性の智慧を修習することによって解脱を次第に得ようとする因の教えであるのに対し、真言密教は、出世間の果の立場で説かれた三昧耶戒と律儀、そして三密によって所取・能取の所知障（意）を救護し、さらに、それを智慧と方便とが無二に結合した智をもって救護する果の教えである。言いかえると、所知障を断ずるかわりに、その悪分別を善分別をもって救い、その善分別を、智慧と方便とが無二に結合した無分別智をもって救い、解脱を与える教えである。

ところで、この真言乗はまた、多くの別名で呼ばれ、それぞれが真言密教の性格をよく示しているのである。

その（1）は秘密乗という別名である。ツォンカパによると、真言乗は隠れて秘密に修法し、法器でない者（未灌頂）の境界（*paravṛtta*）ではないから、そのような人には示されないから秘密乗である、といわれる。すなわち波羅蜜乗の中観佛教などが顕わに修行せられ、誰にとっても差別なく行われ、誰に対しても示される教えであるから顕教といわれるのに対し、真言乗は公開して顕わに修法すると、その時から、その修法は成就しないことを意味し、また、アーチャー

ルヤが未灌頂者にマンダラを見せたり、真言密教の法を授けたり、あるいは未灌頂者がアーチャールヤから法を受けずに修法したりすると、越三昧耶の罪となって地獄に堕ち、悉地が成就せず、死後悪趣に堕ちる、といわれる。従って、入壇・灌頂を受けると、真言密教を学ぶ者の必修条件であり、その意味で師資相伝を原則とする。真言乗の経軌が文字によって編集せられていても、それを読むのみでは真の意味を理解できないようにしてあるのは、そのためである。

(2)は果乗という別名である。果がそのまま道となっているから、果乗である、といわれる。この場合、果とは、住処と身と受用と清浄な事業との四種の果であって、順次に、佛の宮殿と佛の身と佛の富貴と佛の事業とである。すなわち真言密教は、無量宮と本尊の身と供養の資具と法器の要点を清浄にするなどの所作業とを修習して、眼を清め聞く教えという意味である。これに対し、波羅蜜乗の中観佛教などには、このような果の行相と一致して修習する道は無く、発菩提心や六波羅蜜行などによって一步一步向上して行く因の道のみがある。

(3)は金剛乗という別名である。金剛(くわんじょう)とは、区別せられず、分割せられず、大乘であるから金剛乗であって、金剛の理趣と波羅蜜の理趣、すなわち密教と顯教の、あるいは果と因の本性が一つに混合し、二つに区別せられないから金剛乗といわれる。色は空である、ととらえるのが因の乗であり、不変な悲をとらえるのが果の乗であって、空性と悲とに区別せず、因果二つの乗をもっているのが金剛乗である。そこでまた、金剛乗はすべての大乘を集めたものであり、六波羅蜜であり、それらを要略した方便と智慧でもあり、さらにそれらを要略した一味の菩提心でもあり、金剛薩埵の三昧でもある、といわれる。従って、真言乗の教えは波羅蜜乗の中観佛教などの教えを同時に含むものである。

(4)は方便乗という別名である。真言乗は波羅蜜乗より方便に善巧であることが大きいから、方便乗ともいわれる。この場合の方便とは、行者自らのうえに、三十二相・八十種好によって莊嚴された毘盧遮那などの色身(受用身)に

等しい相を修習して“自己が本尊となった”と慢を生ずる方便のことであって、波羅蜜乘における布施、持戒、忍辱、精進および禪定の方便を指すのではない。むしろそれらに比して勝れた真言乗特有の方便を用いるところから方便乗といわれる。

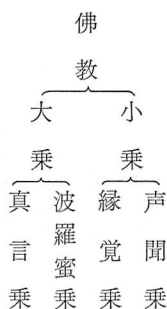
(5)は持明藏という別名である。真言乗の教典は外教の天・人・龍・葉叉等の持明者を利益するために、佛教における諸の持明者としての学処と確立された真理 (siddhanta) とを示すから、持明藏といわれる。これは、いわば真言密教の外教に対する顔であって、波羅蜜乘の中観佛教などには無い面である。なぜなら、中観佛教では外教に対して破邪のみがあつて、摂受は無いからである。

しかし、このような持明藏の性格上、真言乗は外教に応同して説くことが多いから、その真意がわからない者には、真言乗は外教と佛教の複合したもの、外教と佛教の境界がはっきりしないもの、あるいは佛教が外教的に墮落したものなどと誤解されやすいのである。従つて、真言密教の教典を、一般佛教の經、律、論三藏に属さない第四藏であるとするニンマ派の意見もあるが、『蘇婆呼童子請問經』^②など多くのタントラには、經または經藏とし、内容を分析すると、律藏と論藏の二藏をも示しているから、三藏であるとするのが妥当な説である、とツォンカバは結論している。

(6)はタントラ (tantra) という別名である。タントラという語には種々の意味があるが、真言乗においては、タントラとは“相統” (prabandha) の意味であつて、①それにおいて道をなす心の所依 (sthāna, pada)、すなわち灌頂で授かった無自性の智慧や本尊の身と、②心を清浄にする道 (または方便)、すなわち佛の住処、佛身、佛の受用および佛の清浄な事業の四種の果と一致した行相の道と、③清浄となった果、すなわち法身と色身とを得た解脱との三つが相続している修法を示すから、真言乗はタントラといわれ、また、そのような教えを述べる聖典をタントラ、その一群をタントラ類という。

二 真言乗と波羅蜜乗との区分、特徴

佛教をいくつかの乗に区分すべきかについて、ニンマ派のロンチェン・ラブジャムパ（一三世紀）は、インド以来の諸説を挙げた後に、乗はこれだけである、と限定した解釈はありえない、と結論したのに対して、ツォンカパは、次のように佛教を区分する解釈をとった。



また、ロンチェンが、佛教の中でも、声聞乗、緣覺乗、菩薩乗、大（如来）乗の順に、後々がより勝れた果を得る、として、得られる果の勝劣によって佛教を差別し、その中でも、真言乗すなわち果乗は、智慧に悟入したときの見が波羅蜜乗のそれより殊勝であり、さらに真言乗の中では、所作、行、瑜伽、無上瑜伽の順に、前々より後々のタントラ類の果が勝れていると解釈したのに対し、ツォンカパは、勝劣という語の真義を究明して、真言乗と波羅蜜乗との間には、果についての勝劣は無く、道すなわち修習する方法にのみ勝劣がある、という見解をとった。

ところで、ツォンカパは、大乘を波羅蜜乗と真言乗とに区分するその具体的な理由について、①発菩提心に勝劣があるからでもなく、②諸法の真实性を理解する見の有無によってでもない。なぜなら、波羅蜜乗の中に中観と唯識の二つがあるけれども、各の乗に分けることの無いのと同様に、六波羅蜜行を行ずることは、波羅蜜乗と真言乗の両方にあるから、それによって各の乗に区分することはできない。また、③人の機根に利鈍があることと、道を進むのに遅速があることのみによっても二つの乗に区分することはできない。さらに、④ある人は、真言乗は貪を有する所化

の有情を調伏するために説かれ、波羅蜜乗は貪を離れた所化の有情を調伏するために説かれたから、所化の有情が五欲に対する愛染を離れず道に修習するか、その愛染を離れて道を修習するかが、真言乗と波羅蜜乗との二つの乗に区分する理由である、というけれども、二つの乗の中にいづれも、二種の所化の有情がおるから、また、二つの乗にはじめに入る人の区別にそれを適用することは困難であるから、このような区別によって各別の乗に区分することはできない。⑤同様に、修習の道を安樂によって飾ることもまた、真言乗と波羅蜜乗の二つの乗の止(śamatha)にあるから、二つの乗に共通の道であって、それによって二つの乗の道を区分することは不合理である。

では、二つの乗を区分する真の理由は、何かといえ、到達すべき果の乗については、真言乗と波羅蜜乗(中観・唯識)の二者に勝劣の区別はないから、それによって進み行く因の乗に区別があるのであるが、それともただ理解すべき見、思惟すべき発心、行すべき六波羅蜜を学ぶことのみによつては区別できず、利他を成就する因である方便をなすか。い。な。か。に。よ。つ。て。真言乗と波羅蜜乗とに区分されるのである。

すなわち、中観佛教などの波羅蜜乗者のうえには、諸法の真実性や無戲論を修習することによって法身と一致する行相を修習する道はあつても、三十二相・八十種好によつて莊嚴された色身と等しい行相を修習する道は無い。しかるに、真言乗には、その道が有るのである。このように利他の色身を修法する方便について道の体が等しくない、という大きな区別があるから、大乘を二つになしたのであつて、一般に大小乗も、空性の智慧によつて区分せず、方便によつて区分すべきであるが、とくに大乘を二つに区分すべきときは、甚深に通達した智慧によつては区分せず、方便によつて区分すべきである。そして、その方便の主は、色身を修法する部分の中にある。なぜなら、色身を修法する方便、すなわちその色身と等しい行相を修習する「本尊の瑜伽」は、小乗および波羅蜜乗(中観・唯識)の方便より非常に勝れた方便であるからである、という。

このように、大乘を二つの乗に区分する根拠について、ツォンカパは、①無上瑜伽タントラ類では、『金剛網』(東

北 No. 419)、『金剛網難語釈・真性増益』(東北 No. 1196)、『シニャーナバーダの『我成就入』』(東北 No. 1860)、『シャーンティパーの『吉祥、秘密集会マンドラ儀軌註釈』』(東北 No. 1871)、『シニャーダラの『俱生光』』(東北 No. 1918)、『ビナヤダッタの『吉祥、秘密集会タントラ難語釈』』(東北 No. 1847)、『ビナヤダッタの『大幻マンドラ儀軌上師口説ウパデーシャ』』(東北 No. 1645)等を挙げ、②瑜伽タントラ類では、『真実撰』第一品(東北 No. 479)、『シャクヤミトラの『真実撰広釈コーサラ莊嚴』』(東北 No. 2503)、『アーナンダガルバの『真性光作』』(東北 No. 2510)を挙げ、③所作・行タントラ類では、ブッダグフヤの『大日経の要義註』(東北 No. 2662)、『シャーンティパーの『三乗建立』』(東北 No. 3712)等を挙げて詳しく論証しているが、その最後に、「要するに、諸法は自らが自性として成立することは空であり、無自性である、という確実な見と、"自己自身が本尊である"と修習して生起する"本尊の瑜伽"との二つを結合して、果の二身(法身と色身)を成就することが、一切の真言行者の進む共通の道であって、種々のタントラ類の中に、この二つ以外の多くの道が説かれていても、ある道は空性の通達によく入る方便であり、ある道は"本尊の瑜伽"の支分である、と知るべきである」と結論している。

このように、中観佛教などの波羅蜜乗と真言乗とは、道に区別があっても果に勝劣は無いから、ツォンカパは、波羅蜜乗において説かれた第十一普光地^③は、真言乗に説かれた持金剛地と同一義である、とすべきであって、その地を、顯教の経には"三無數劫を経て成就する"とし、また密教教典(タントラ類)の中には"一生のうちに成就する"と言ったと知るべきで、持金剛といわれたから波羅蜜乗の果ではない、ととるべきではない。従って、真言乗において第十二地、第十三地および第十四地を説くことがあっても、それらは中観佛教などの波羅蜜乗において説かれた「菩薩の」諸地と接合すべきである、という。しかし、この真言乗と等しい佛位に、真言乗の道に依らず、波羅蜜乗に説かれた道の上に依って達することができるかといえ、インドの多くの学者の見解のとおりに考察すべきであるが、第十一普光地までは波羅蜜乗の道のみで達することができる^④と認めても、それより上にまで行くことができる

は見ないのが一般的見解である、ともいう。

次に、ツォンカパは、波羅蜜乗に対する真言乗の特徴として、前述のような道の勝劣の区別の外に、真言乗の道は、波羅蜜乗のそれに比較して、より速く成佛できることを指摘している。しかし、その場合、波羅蜜乗の道が三無數劫を経て達することができる第十一普光地を、この世において得る（即身成佛）のは、真言乗のすべての道によってではなく、ただ無上瑜伽タントラの道のみによってである。それゆえ、所作・行および瑜伽タントラ類によって修習する真言行者が、即身成佛を得ようとおもうならば、さらに無上瑜伽タントラの二つの次第、すなわち生起次第と円満次第とに入らねばならないのであって、自らの道のみによっては不十分である、という。

また、ツォンカパは、他のアーチャールヤ、とくにトリピタカマラの『三理趣灯』（東北 No. 370）の説を解説する仕方、波羅蜜乗に対し、真言乗の勝れた四つの特徴を挙げ、それをそのまま認めている。その第一は、真言乗の道は愚惑が無いこと、第二は方便が多いこと、第三は無難行であること、第四は利根の者のみ資格があることである。その中、

①愚惑がないとは、波羅蜜乗の人びとは布施等を行うとき、すべての有情を満足させることができない。頭を布施するなどの外の布施を行って、長時間を経て菩提を得るのに対し、真言乗の人びとは、方便と智慧が無二の三昧を数習して、無辺の有情を満足させ、布施を円満するから、そのような愚惑は無いことをいう。

次に、②方便が多いとは、波羅蜜乗の中に言われた懺悔、律儀、禁戒など寂滅の行を行わず方便によっては一切の有情を利益することができないのに対し、真言乗は一切の有情を利益するために、多くの方便すなわち四種のタントラ類を説いたことをいう。その中には、初めに、自己自身の煩惱が広大な佛性であることを知って、三密を修する種々な方便が言われているからである。

次に、③無難行であるとは、難行か難行でないかは、行者その人の心によって決まるから、真言乗は行者それぞれ

の欲することと一致するように導くことをいう。すなわち上根の上の者には大印を示し、上根の中の者には智印を示し、上根の下の方には三昧耶印あるいは業印を示すごとくである。

次に、④利根の者のみ資格があるとは、小乗の瑜伽者は真实性（空性）を知らないから鈍根であり、波羅蜜乗の瑜伽者は方便に迷乱するから中根であり、真言乗の法門を行ずる人びとは何にも惑われないから利根である。なぜなら、真言密教の法門は、これを方便に巧みな利根の人が行じたならば、清浄処を得るけれども、そうでない他の人が行じたならば、悪趣に堕ちるからである、という。

おわりに

以上、真言密教の語義、波羅蜜乗真言乗との区分および特徴について、ツォンカパなどの見解を概説して来たが、これによると、真言密教の教学を単に「空観の密教化」という言い方でとらえることは、厳密には不適当である。なぜなら、真言乗の別名である金剛乗の定義によれば、金剛乗（密教）という語は同時に、中観佛教の空観を含んでいるからである。

註① S. Bagchi 本、Guhyasamāja-tantra, p. 126.

② 東北 No. 805, 137 a. 大正一八、七四五頁上。

③ 波羅蜜乗の中には、第十一普光地を得て、習気ならびに煩惱障・所知障の二障すべてを断じたとき、十力・四無畏・十八不共佛法などの佛の一切の功德を得るという。